



松波 康男准教授

(専攻 社会人類学、アフリカ地域研究)



(1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

わたしたちは、さまざまな種類の関係性の網の目の上を生きています。学校では、仲間内で水平的関係を結び、ゼミの教員や部活動のOBの前では階層的関係におかれます。バイトに行けば、雇用一被雇用関係のなかでこき使われることがあるかもしれません。電車通学の際に、周囲の知らない人とは挨拶も交わさず一定の距離を保つ、といった関係の仕方もあるでしょう。

わたしたちの社会で、このひとつひとつの関係性は、わたしたちの振る舞いを規定しています。例えば、あなたは通学電車でよっぽどのがなければ隣の他人と話しをしません。そしてまた、周囲の人あなたに話しかけてこないのは、乗客同士でそのような関係が暗黙のうちに成立しているからでしょう。すなわち、「このような振る舞いをするだろう」という他の人に対する予期がその場で満たされているわけです。どうして見ず知らずの人たちの間で、このような関係を結ぶことが可能なのでしょうか？ これは決して「当たり前」で片づけられることではないはずです。なぜなら、ある地域の、あるコミュニティでは、電車に乗る際に周囲の人と世間話をするのが、逆に「当たり前」だったりします。それでは、わたしたちの社会でこのような現象が起きることを、どのように理解したら良いのでしょうか。

社会学における主要な問いは、いま現実に「社会で起きていること」が、なぜ、あり得たかもしれない他のかたちではなく、そのようなかたちで生じているのか？ということだと思います。ここでいう「社会で起きていること」は非常に広い意味で考えられるものです。グローバル化や新自由主義の進展といった政治・経済のこと、新興宗教の台頭やパワースポットのブームといった信仰のこと、同性婚やLGBTといったジェンダーのことなど、例を挙げれば枚挙にいとまがありません。

このような、ありとあらゆる「社会で起きていること」が、なぜ、いま、そこで、そのかたちで現出しているか？ この問いに向かって記述し、ときに出来合いの認識枠組みを批判しつつ、他のあり得るかたちの可能性を示すことが社会学の仕事の一つだと考えています。

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

わたしの研究調査地は東アフリカです。数日間の滞在のこともあれば、数ヶ月に及ぶこともあります。ある程度の期間そこでフィールドワークを行い、研究を進めています。私が専門としている社会人類学では、自らと異なる環境に生きている人々について詳しく知ろうとする際に、調査者自らがそのコミュニティの内側に入り込んで、ミクロな分析を行うことがよくみられます。ときに現地の人間関係に巻き込まれながら、人々の日々の暮らしに参加しそれを観察することで、現地の人々の生について、現地社会のコンテクストに根差して理解しようと試みます。

このようにして細部にわたって記述されたフィールドワークの成果物はエスノグラフィと呼ばれます。わたしのこれまで実践してきた研究は、東アフリカのとくに農村社会の人々の宗教生活を対象に、フィールドワークによって人々について理解を深め、その姿をエスノグラフィで表す人類学的な研究です。

したがって、わたしは専門を尋ねられることがあれば人類学と答えており、社会学者を名乗ることはほとんどありません。人類学は、アフリカ、南米、アジアなどの「他文化社会」について研究し成果を蓄積してきましたが、1990年前後から、他文化を表象する行為自体に含まれる権威性に対する批判を受けて、自省的な議論（「ライティング・カルチャー・ショック」）を経たのちは、自社会を対象とする研究が目立つようになりました。官僚機構、グローバル経済、ラボラトリー（研究所）なども、今日では、人類学の研究の対象です。

また、これまでは、途上国での調査で「現地固有の問題」として扱われてきた、貧困、疾病、災害なども、今日では、自らの社会に暗い影を落とす課題であるという認識のもと、人類学の研究の対象となっています。これまで「他文化社会」を描くために研鑽してきた方法論を、自らの社会に適用する研究実践がますますみられるようになっていきます。わたしがゼミやその他授業で教える内容は、このような人類学的な思考の潮流に即した学説・理論が中心となります。

学説・理論と述べましたが、人類学において研究の焦点となるのはなにより、そこで生きる人々の生そのものであるということを忘れてはなりません。他者について研究するということは、理論を華麗に使いこなす「頭の良さ」を競うゲームではありません。エスノグラフィにおいて理論というものは、人々の生の営みを彩る背景に過ぎないのです。そしてまた、体力、粘り強さ、社交性、直感などといったあなた自身の個性を総動員して、フィールドワークに没頭することもまた、エスノグラフィに描かれる人々を色彩豊かにする要素となります。あなたが描こうとする他者は、つねにあなたとのコミュニケーションを経て、あなたによって理解され表象される存在だからです。他者の生について、深く理解したいと考えるとき、人類学はあなたの頼もしい味方になるはずです。

(3) 1～2年次で読んで欲しい本

1. 『銃、病原菌、鉄（上・下）』（J. ダイヤモンド 草思社（倉骨彰訳）2012）世界の富・権力は「北」の一部に偏り「南」には低開発に苦しむ地域が少なくありません。このような非対称性はどのように生じたのでしょうか。この地域差は、民族間の能力の違いによるものでもなければ、不確実な偶然の産物でもないと思われ、著者は述べます。生物学や地理学、人類学などさまざまな学術領域の知見を組み合わせながら、世界秩序が今日のかたち形成された「謎」を解き明かしていきます。
2. 『うしろめたさの人類学』（松村圭一郎 ミシマ社 2017）「世の中どこかおかしい。なんだか窮屈だ。そう感じる人は多いと思う。でも、どうしたらなにかが変わるのか、どこから手をつけたらいいのか、さっぱりわからない」このように始まる本書は、日本に暮らす多くの人々が共感できるであろう、この「もやもや」に対して、人類学的な思考を当てはめて紐解いていきます。平易な語り口で、しかし力強く本書が教えてくれるのは、わたしたちが既存の認識をずらし、さまざまな境界を引き直すことこそが、社会を「再構築」するための鍵となるということです。
3. 『アフリカ少年が日本で育った結果』（星野ルネ 朝日新聞出版 2018）関西育ちのカメルーン人である著者は、4歳に満たない頃に両親とともに日本を訪れて以来、同年代の子ども達と共に日本で育ちました。日常的に生じるさまざまな異文化体験を漫画によってユーモアを交えて表し、ときにカメルーンと日本の文化を並置し比較しながら、その差異や共通性などについて考えていきます。文化相対的思考を学べる良書です。
4. 『イスラームの日常世界』（片倉もとこ 岩波新書 1991）イスラームは、わたしたちが通常「宗教」ということばからイメージするような、信仰の対象や実践についてのみをあらわす語ではなく、生活体系全般にかかわるものです。イスラーム社会の日常生活がどのようなものか、著者の参与観察に基づき、易しいことばで解説してくれます。イスラーム理解の第一歩として最適です。

5. 『社会科学系のための「優秀論文」作成術』（川崎剛 勁草書房 2010）論文には「型」があります。大学教育において論文執筆のスキルは、指導教員との徒弟制度のなかで、試行錯誤を経て、なんとなく身に着いていくものという理解が過去にはあったように思います。本書は、ありがたいことに、そのスキルを体系化し、論文の種類に合わせた展開方法まで丁寧に解説してくれます。

(4) 3～4年次で読んで欲しい本

1. 『異文化の学びかた・描きかた：なぜ、どのように研究するのか』（住原則也・箭内匡・芹澤知広著 世界思想社 2001）卒論の作成にとりかかる際に参考にしたい、異文化研究の初学者向けの入門書です。単にテクニックが書かれた how-to ものではなく、「どうしてそう考えるのが良いのか」というところまで踏み込んだ説明がされています。異文化研究の基本的な視点や方法について有益な指針が得られるはずです。
2. 『アザンデ人の世界：妖術・託宣・呪術』（E.E. エヴァンズ＝プリチャード みすず書房（向井元子訳）2001[1937]）イギリスの社会人類学には妖術実践についての研究蓄積があります。本著は、今も参照されることの多い妖術研究の古典であり、学術領域を超えて読者を獲得した名著です。著者は、長期のフィールドワークと緻密な記述によって、現地の妖術実践には近代西洋的合理性とは異なる、現地固有の合理性があることを明らかにしました。妖術、呪術、邪術について興味・関心がある人はもちろんのこと、自然科学の客観性、合理性についての議論は、今もなお多くの人を魅了するものであると確信しています。
3. 『儀礼の過程』（V. ターナー 新思索社（富倉光雄訳）1996[1969]）大辞林にも掲載されている「コムニタス」の語は、人類学者ヴィクター・ターナーによってこの著作で提唱され

た学術用語です。今日のわたしたちの社会は、高度に分業・階層化されており、その成員は、社会的な役割に応じて特定の役割を振る舞うことで、社会は一定の秩序を保っています。ターナーが本著で提唱する「コムニタス」の語は、そのような日常的な秩序が無効化するような瞬間を捉えるものです。祝祭、カーニバル、野外フェスなどの熱狂の最中で日常の秩序が溶解し、居合わせた人々のあいだで水平的で全人格的な関係性が結ばれるといった現象について、経験したことがある人もいるのではないのでしょうか。そのような人は楽しく読めると思います。ぜひ手に取ってください。

4. 『民族紛争を生きる人々：現代アフリカの国家とマイノリティ』（栗本英世 世界思想社 1996）東アフリカのパリ人とアヌア人という、ふたつの民族集団を主人公とした紛争の民族誌です。アフリカの民族紛争といえば、国際政治学者らによってマクロなレベルから解説されることが一般的ですが、著者は現地で長期のフィールドワークを実施し、同地に暮らす「ふつうの人々」の日常世界とのかかわりのなかから、その紛争について表しています。民族集団間の摩擦、衝突、戦闘について掘り下げたい学生には必ず読んでほしいです。

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

-
1. 松波康男（2019）「南スーダンにおける紛争解決合意（ARCSS）」署名を巡る IGAD 加盟国の関与」、『アフリカレポート』、第 57 巻、1-12、IDE-JETRO。
 2. 松波康男（2013）「異質な参詣者と聖地の共同性：エチオピア・ボサト郡に見られる参詣の諸相」、『年報人類学研究』、第 3 号、74-96、南山大学人類学研究所。